

黒髮山

堀辰雄

青空文庫

源氏物語の「總角」^{あげまき}の巻で、長患ひのために「かひななどいとはそうなりて影のやうによわげに」、衾^{ふすま}のなかに雛^{ひいな}かなんぞの伏せられたやうになつたきり、「御髪^{みぐし}はいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕よりおちたるきはの、つやつやと」した宇治の姫君が愛人の薫^{かゑる}の君たちにもとられながら、遂に息を引きとつてしまふ。そのとき薫の君が「夢かとおぼして、御殿油^{おほとなぶら}をちかうかかけて見たてまつり給ふに、隠したまふ顔もただ寐たまへるやうにて」、なんだかいつまでもその儘の姿にして、置いておきたい程のいぢらしい氣がしながら、「御髪をかきやるにさとうちにほひたる、ただありしながらのほひに」何とも云へず切なくなる心もちを描いてある。私は其處を讀んだとき非常に感動した。

若く美しい女のもう冷たくなつた亡骸を描いて、そのかき亂れた髪のみだけがまだ生きてゐるときと同じやうに匂ふところを書き添へたのは實に效果的である。これほど簡潔で深い印象を與へる死の場面はさう他處にあるものではない。私達の遠い祖先は既にかういふ効果を知つてゐたのかと思つた。

そこにはもう圓熟した物語作者がある。人間の死に對してもあまり怯^{ひる}まず、佛教などで

鍛へ上げられた、透徹した觀念を既に持った人の目であつたにちがひない。

この頃私は萬葉集を屢 手にとつて見てゐるが、そんな源氏物語などの頃とは異り、宗教思想が未熟だつたせるか、生と死との境界さへはつきり分からぬ古代人らしく、

秋山に黄葉もみぢあはれとうらぶれて入りにし妹は待てど來まさぬ

とか、又、

秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道やまぢ知らずも

などといふ考へ方でもつて死者に對してゐる。これは歌といふものの性質上、わぎとさういふ原始的な素朴な死の觀念を借りて、山に葬られた自分の妻を、恰も彼女自身が秋山

の黄葉のあまりの美しさに憑かれたやうにして自ら分け入つてしまつたきり道に迷つてもう再びと歸つて來ないやうに自分も信じてをるがごとくに歎いて、以つて死者に對する一篇のレクキエムとしたのかも知れない。

萬葉の頃の悼亡の歌には、直接に自分の歎きを痛切に吐露したものよりも、さうやつて死者の葬られた山を對象とし、或は空しくなつた家の日ごとに荒廢してゆく有様や、故人の遺物である木や花や鳥などを對象としたものが多いやうである。肉體が死んでも魂は分離して亡びないことを信じてゐた古人は、深い山の中をさすらつてゐる死者の魂を鎮めるためにその山そのものの美しさを讃へ、又、死後彼等の居處や木々を拂はずに其處に漂つてゐる魂の落ちつくまで荒れるがままにさせ、ときをりその荒廢した有様を手にとるやうにさながらその死者の魂に向つていふやうにいふ、——そんな事を私は萬葉の挽歌作者をよくよみながら考へる。萬葉人たちが實際の信仰としてさういふ考へ方をしてゐたか。或は、もつと古代の人たちの信仰の名残りから、その中にある生活感情を再現しようとしたところ、に彼等の文學があつたのであらうか。

山吹の立ちよそひたる 山清水やましみづ汲みにゆかめど道の知らなく

これも挽歌の一つである。萬葉學者の一人が此歌の第一句から第三句までが「黄泉」の和譯であることを發見した。周圍に山吹の黄いろい花の咲いてゐる泉は即ち黄泉だといふことに氣がついたのである。さうなのかも知れない。さう云はれないであると、これでも悼亡詩なのかと思ふ位の、明るい感じをさへ此歌は誰にでも與へるだらう。しかし死んだ貴女のために、山の中にはひつて行かれた彼女の魂を鎮めるための祈りとしての合唱のやうな種類のものだとしたら、かういふ歌もそれが挽歌としてはつきり分かつてくる。そして死から來るじめじめとした感じのない、清冽な後味を跡に残つた人達の上に與へることが出来るのである。

萬葉人としても死後の人體の醜惡を知らないであつたわけではなかつたらうが、否、それを後代よりもよく知り、それに對する恐怖の一層はげしかつたあまりに、彼等の死者を哭する歌はいよいよ切なく美しくならなければならなかつたのであらう。

奈良へは、二年前の若葉の頃、神西清と一しよに往つた。

誰でもさうするやうに、秋篠寺、唐招提寺、薬師寺、法隆寺などを　つて歩いたが、古い佛たちを拜する傍ら、私は古い大和の村々や野や民家や、ことに里近くの山々を見ることを楽しんだ。

萬葉びとがこれらの村や山々に彼等の謂はば前宗教的 (pre-religious) な生活を托しながら小さな喜びや悲しみを歌ひ續けてゐた間に、一方では既に、今日もなほ残つてゐるかういふ大きな寺が建立され、大きな佛たちが製作せられてゐたのだといふことは不思議な心もちがしてならなかつた。それほどその二つのもの——無智にちかい土俗的な信仰の中に隠れてゐる萬葉びとと、佛を製作しつつあつた本當の信仰に目覺めた人たちとの間には互に共通しあつたものが殆ど無かつたやうだからである。前者が後者のために遂に大和や山城から逐はれて、遠い國々を彼等の歌を携へたまま流浪し出す日はそのとき既に近づいてゐたのである。

私は毎日のやうに古い寺々を歩き、古い佛たちを拜しながら、殆ど萬葉の歌を口に上らせなかつた。新薬師寺へ行く途中の、くづれた築泥ついちがちの道などは好きで何度も歩いたが、私はそこを通りながら思ひがけず伊勢物語の一節などをなつかしく思ひ出すやうな氣分に

させられるやうなことはあつても、家持やかもちの歌ひとつ浮んで來なかつた。萬葉の歌はいはもう大和の村々にも生きて居らず、寧ろ私達の平凡な日常生活の奥深くに反つてひよいと見出されるやうなときにだけ本當に私達に生きてくるのではないかとさへ思へた程だつた。

だが、大和の村々を歩き疲れて宿に着き、夜ふけていつまでも目を覺まして晝間見てきたさまざまな事物を思ひ浮べてゐるやうなときなどには、どうかすると熱心に見てきた古い佛たちの顔よりも、木深い山の奥にいまだに奇蹟的にその儘埋まつたきりであるかも知れない死んだ古代人のひとり取り残された淋しさうな姿などが、いまにも目に見えて來さうになつたりした事もないではなかつた。

神西が都合で先きに歸京し、私はそれから三四日ひとりで奈良に止まることになつたとき、私はもう古い寺々は訪れず、ただぼんやりとそこいらの村々を歩いて暮らすことにした。

私はまきむく卷向山やふたがみ二上山などの草深い麓をひとりでぶらぶらしながら、信州の山々を見馴れてゐる自分のやうな者にも、それ等の山そのものとしては何らの變哲もなく見える小さな山々に對して一種異様な愛情の湧いてくるのを感じ出してゐた。いまから千年以上も前、それらの山々に愛する者を葬つた萬葉の人々が、そのとき以來それまで只ぼんやりと見過ごしてゐたその山々を急に毎日のやうに見ては歎き悲しみ、その悲歎の裡からいかにその山が他の山と異り、限らないそれ自身の美しさをもつてゐることを見出して行つたであらう事などを考へてゐると、現在の自分までが何かさういふ彼等の死者を守つてゐる悲しみを分かちながらいつかそれらの山々を眺め出してゐるのだつた。さういふこちらの氣のせるか、大和の山々は、どんなに小さい山々にも、その奥深いところに何か哀歌的なものを潜めてゐる。

奈良を去る前日、私は「大和雜記」といふ本を讀んでゐたら、奈良山の一部に人麻呂歌集などにも出てゐるくろかみ黒髮山といふ山があり、そこから法華寺村の北方のうたひめ歌姫といふ部落に出る舊道のある事を知つて、ちよつとその黒髮山とか、歌姫といふ美しい地名に心をそられて、その山越えを試みてゐた。其處でその翌朝、私は奈良坂の上までバスで行き、元明、元正兩天皇の御陵のあたりから大體の見當をつけて、山のなかへはひつて

行つた。二つのみささぎは通り過ぎた。もう昔の佐保山さほやまである。私は手にしてゐた參謀本部の地圖に大體黒髮山らしいものの印をつけておいたが、その山の中はまださほど深いとも思はれないのに、小さなそま杣道が多くて、私にはすぐその地圖が何んの役にも立たない事を知つた。私はもうあてずつぼうにそれらしい山を探して見るより仕方がなかつた。

さうやつて少し歩いて見てゐたが、てんで見當がつかず、こんな工合では黒髮山を捜すことは先づ斷念した方がいいと思ひ、せめて歌姫の方へ出る舊道でも見つけようとして後戻りをしてみたりしてゐたが、どれがさつき通つて來た道かなんぞも分からなくなり、すこし困つた事になつてきたなど思つた。この儘、この山中に迷つていつまでも自分がさまよひ續けてゐるやうな事にでもなれば、私は萬葉びとに考へられてゐたやうな、山に葬られた死者の死後の姿そつくりではないか。ただあたりは若葉の明るい山で、私の上に一めに黄葉もみぢばが浴びせられるやうに散つてゐないのがちよつと興を殺ぐ。と、そんな暢氣な事を考へながら、もうちよつと此の儘かうして自分をそんな死人に擬して山の中をさ迷つてゐて見たいやうな氣もしてゐるうちに、いくら歩いても同じところばかり歩いてゐるやうなので、私は一方ではなんだか本當に自分が佐保山の奥に迷ひ入つたやうな不安をさへ感じ出して來た。しかし、何處までいつても、山は若葉のせみか、非常に明るかつた。明る

いなりに、山は無氣味にしんとしてゐた。誰一人にも行き逢はず、私は小一時間もそんな山の中をだんだん心細くなりながら歩きまはつてゐたが、ときどき古代人の幻想したやうな木の葉をいつぱい浴びた死者のあはれ深い姿が、自分の裡に氣味わるいほどまざまざと蘇つて來てならなかつた。

漸く私は自分の行く手に大きな池の一部らしいものを認め、そつちへ近づいて行つて見ると、それが聖武天皇陵の近くの池であるらしい事を地圖で知り、自分の目標から大ぶ外れて來た事を認めたが、そこからはもう法蓮はふれんの村がすぐ近きうなので、半ばほつとした。結局、實際に存在してゐるのだからないのだから分からないやうな黒髮山は見當さへつかず、只そのまはりをうろろと歩いてゐただけだつた。それでも、その山歩きは私には決して無駄ではなかつた。私はその小一時間ちかく「萬葉的に」自分が死んでゐたと云へば云へるやうな、子供らしく微笑ましい想像から、その奈良に於ける最後の日をいまだに忘れがたく思つてゐる。

青空文庫情報

底本：「堀辰雄作品集第五卷」筑摩書房

1982（昭和57）年9月30日初版第1刷発行

底本の親本：「曠野」養徳社

1944（昭和19）年9月20日

初出：「改造 第二十三卷第十三号」

1941（昭和16）年7月号

入力：tatsuki

校正：染川隆俊

2011年3月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒髪山

堀辰雄

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>